武者小路実篤「その妹」歌劇台本

登場人物
野村広次（２８歳　テノール）　　静子（広次の妹　ソプラノ）
西島（３３歳　バリトン）　　芳子（西島の妻　メゾ・ソプラノ）
高峯綾子（高峯の妻　ソプラノ）

時＝第二次世界大戦後の昭和時代中期　　季節＝冬

第一幕　第一場「野村広次の部屋、午前」

登場人物
野村広次（２８歳　テノール）　静子（広次の妹　ソプラノ）　西島（３３歳　バリトン）

野村広次が机に向かって書き物をしている。

A　二重唱「野村さんこんにちは」

西島　野村さん、こんにちは。西島です。
広次　やあ、西島さん、よく来て下さいました。（座布団を勧める）どうぞ。
西島　有難う（野村の隣に座る）。昨日まで旅行していましたので、今朝お作を拝見しました。近いですから早速来ました。
広次　ありがとう。
西島　お作はいいものだと思います。君でなければ書けないと思います。心の苦しみがよく出ていると感じました。君は血や涙や全生活を作品の中に絞り出すことに出来る数少ない人の一人だと思います。同情は抜きますが、目がご不自由なのに、よくあれだけ書けたと思いました。
広次　ものになっているでしょうか。
西島　なっていると思います。まだムラなところがないとは言えませんが、何しろ君の心の苦しみがよく出ています。

B　広次のアリア

広次　本当にもう少しで自殺しようかと思いました。戦争で死ななかったのも不思議ですけど、目が見えなくなってから自殺しなかったのも不思議です。妹がいてくれたからです。私がどんなに惨めに生きていても、妹は私が生きていることを喜んでくれました。私がどんなに癇癪を起こしても、私を憎んだりしませんでした。
私は他人の手を借りないでは、生きていけない身体になりました。私はへんに頑固にできていますので、自分の読みたい本きり読まない質なのです。それに自分が生きていることが、他人に迷惑をかけることになるのですから、気が引けてなりません。幸い妹がいてくれるので助かっています。妹がいませんでしたら、生きていることに希望を持つことが出来なかったでしょう。

C　二重唱「本当に同情します」

西島　本当に同情します。さぞ苦しかったでしょう。
広次　このような身体になった以上、今更不平を言ってもはじまりませんから、どうにかして目が見えなくてもできる仕事、で自分の運命を切り開いて行きたいと思います。…絵の方だと良かったのすが、…絵も５～６年はわかりませんでした。
…やっと名前が出始めたときに、目をやられたのですから、少し可哀そうな気もします。（かたわらからスケッチブックを取り出して西島に渡す）よく絵を描いている夢を見て、目を覚まして怒鳴ることもあるのですよ。今でもこんな絵を退屈まぎれに描いています。

今の私はもう、まったく目が見えないのですが。
西島　（受け取って、ながめる）これは自画像ですね。
広次　頭の中にしまってある自分の顔が見えるのです。色つやも光線の具合もわかるのです。
西島　これは高峯の奥さんですね。
広次　判りますか。
西島　よく似ています。
広次　もう子供ができたそうですね。
西島　ええ。
広次　随分変わったでしょう。
西島　いいえ、そう変わてません。これは妹さんですね。
広次　そうです。
西島　これによく似た、君の描いた油絵を持っています。
広次　そうですか。
西島　高峯君の奥さんからもらったのです。
広次　今見たら、たまらない絵でしょう。
西島　そんなことはありません。今でもいい絵だと思っています。

D　二重唱「せめて１０年も」

広次
西島　せめて、もう１０年も絵が描けたらと、１０年も絵が描けたらと、時々　時々思わないことは、思わないことは、ありません。

E

広次　しかし、もう諦めてはいます。…どっちにしろ知れたものですからね。
それから、少し厚かましい気もしますけど、私の小説を君の雑誌に載せていただくわけには行かないでしょうか。
西島　私一人の考えではお載せしたいと思いますが、私一人の考えでも行きませんから。
広次　無理にとは申しませんけど、よかったら載せていただけるとありがたいのです。
西島　なるべく載せるように骨折って見ましょう。しかし、あの作一つで、そう反響を得ることはできないでしょう。
広次　それは私も知ってます。

F

…静子かい。
静子　（お茶をもって登場する）はい。（お茶を持って、上手から登場）
広次　妹です。
静子　よくいらっしゃって下さいました。（お茶をすすめる）どうぞ。
西島　（お茶を受け取って）有難う。はじめまして、西島です。昨日まで旅行していましたので、今朝お作を拝見して、早速伺いました。
静子　兄の小説は、どうでしょうか。（少し離れた傍らに座る）
西島　お作はいいものだと思いました。
静子　それは、本当で御座いますか。
西島　お世辞は申しません。
静子　兄の小説を雑誌に載せて頂けますか。
西島　友達と相談して見ましょう。
静子　西島さんお一人のお考えでは、どうお思いになりますの？西島さんお一人のお考えで、どうにでもなるのではございませんの？
西島　そうも行きません。
静子　それでも、西島さんが是非出そうとお思いになれば、行かないことはないのではありませ

んか？
広次　静ちゃん！
静子　それでも、私今載せるとおっしゃって頂きませんと、もう出して頂けないような気がするのですもの。
広次　西島さんの方にもいろいろご都合がおありになるだろうし、あの小説は載せてもらっても思うような反響があるわけでもないからね。それに私たちの仕事はゆっくりするより仕方がないからね。

G　静子のアリア

静子　お兄さん、お兄さん、そんな呑気なことを言っていられませんのよ。私もしかしたら、近いうちに、近いうちに、お嫁に、お嫁に行かなければならないかも知れませんのよ。

H

広次　そんなことが。
静子　そうおっしゃってましたわ。叔父さんが大変お世話になっている方の息子さんが、私を是非もらいたいとおっしゃったのですって。叔母さんが私のことを果報者だとおっしゃってましたわ。
広次　静ちゃん。お前は行く気があるのかい？
静子　私は行きたくありません。お兄さんのお仕事の手助けをしなければなりませんからと申しましたわ。もう、２～３年待って頂きたいと申しました。
広次　そうしたら？
静子　待てばきっと結婚するかと言われました。
広次　お前は何と言った？
静子　それは判りませんと言いました。
広次　そうしたら？
静子　大変お怒りになって、先様にそんな返事ができるかと言われました。そうして、もし叔父様が、このことで免職させられたらどうするとおっしゃるの。
広次　お前どうした？
静子　そんなことある訳ないと申しましたの。叔母さんは、いいえ、そうに決まってますとおっしゃるの。自分の娘だったらこんな我が儘な真似はさせないっておっしゃいましたわ。
広次　それから？
静子　泣いてしまいました。
広次　あゝあ。

I

西島　失礼ですが、そのお話の方のお名前を聞かせて頂けますか。
静子　相川さんとおっしゃいますの。ご存じですか？
西島　相川三郎という方ですね？その人なら知ってます。
　　僕より６つ下のクラスにいた人で、よくない噂で退校させられた人です。

J　三重唱「そんな人なのか」

広次　そんな人なのか。そんな人なのか。叔母さんは、叔母さんは、そんな人にお嫁に行けと言うのか。
静子　そうでなければ私のような者を相川様でもらいたいとおっしゃいませんわ。
広次　それならば行ってはいけないよ。どうしても行ってはいけないよ！
　　それならば行ってはいけないよ。どうしても行ってはいけないよ！
静子　もし、叔父様が免職させられたら？
広次　こんな不当なことで免職になったって。こんな不当なことで免職になったって。

静子　その時私たちは、どう生きていられますの？　どう生きていられますの？
広次　こんな話はもうよそう。いやな話ばかりお聞かせいたしました。このような話はお聞かせしたくなかったのですが。
西島　いいえ。

K

静子　兄の小説を雑誌に載せて頂けますか？
西島　載せましょう。原稿は、また戴いて行きます。
静子　失礼なことばかり申しました。お作を拝見しておりましたので、もうよく知っている方のような気がいたしまして。私の方ばかりがよく存じているということをつい忘れておりました。

L　アリア「あなたのことも、よく存じております」

西島　あなたのこともよく存じております。高峯さんの奥さんからいただいた、お兄さんがお描きになった、あなたの肖像画が、あなたの肖像画が、私の部屋に、私の部屋にあるのです。

M

静子　まあ！兄の描いた絵を飾ってくださるのですか。
広次　高峯君に会ったら、僕からもよろしくお伝えください。
西島　伝えましょう。それからこんなことを申すのも失礼ですが、お入用の節はおっしゃってください。
広次　有難うございます。
静子　いらっしゃって頂いて兄がどんなに喜んだでございましょう。どうかまた、お出かけください。
西島　有難う。さようなら。
広次　さようなら。

―――　間　―――

N

広次　帰ったかい？
静子　お帰りになりました。お兄さんの小説がいいものだとお聞きして、私本当にうれしいです。
広次　そうかい。西島さんは静ちゃんが頼んだから載せる気になったのだ。お前が醜かったなら、載せてくれるとは言わなかったろう。…結婚の話は本当かい？
静子　本当ですとも！向こうでは来るものと決めていらっしゃるそうです。相川様は、自分が言い出したことは、是でも非でも通そうという方なのだそうですね。特に下の者に対しては。叔父様が本人に聞いて見ますとおっしゃったら、本人に相談する必要がどこにあるのだ。君は三郎に不服があるのかと、おっしゃったそうです。
広次　叔父さんはどうしたのだ？
静子　叔父さんはそれでも、はっきりした返事はなさらなかったそうです。すると、君は働きがあるから僕の会社で使っていると思っているのか。この結果がどうなるか君は知っているだろうね。まあ、考えておいてもらいたいと言ったそうです。
広次　しかし相川は何故お前をもらいたがるのだ？
静子　１０日ほど前に叔母さんのお伴で電車に乗りましたら、お友達といらっしゃったのです。私一昨日、叔父さんのお伴で相川さんの所へ参りましたの。
広次　何で行ったのだ？
静子　何故だかわかりません。叔父さんのお伴で行ったのです。途中まで行くと相川さんの所にお寄りしようとおっしゃるのです。立派なお宅でしたわ。如何にもお金がかかったという

お宅でした。
広次　相川さんのお父さんやお母さんに、丁寧にご挨拶したのだろう。
静子　ええ、しました。それだけなら、まだいいのです。もっとひどいことがありました。
広次　どうしたのだ？
静子　湯に入れとおっしゃるのです。
広次　本当か！

O

静子　叔父様も、是非入れていただくといい、結構なお湯だからとおっしゃったのです。
広次　それで、入ったのか。
静子　はい。
広次　誰と入ったのだ？
静子　後から奥様が入っていらっしゃいましたの。
広次　お前は恥知らずだ！
静子　湯から出ましたとき、三郎様が立っていらっしゃいました。まさか故意だとは思いませんでしたので、あっと言ったら、三郎さんはあわてて逃げていきました。

P 広次のアリア

広次　目が見えていたら、目が見えていたら、こんなことはさせない。こんなことはさせない。西洋に生まれていたら、西洋に生まれていたら三郎と決闘しているところだ！ただではおかない。ただではおかない！みんなぐるだ。みんなぐるだ！
静子　…それでも、私よりもっと可哀そうな女の人が、世の中にはいくらでもいますわ。
広次　おれは恥知らずにはなれない！いつまでも負けてはいない！石にかじりついてでも、石にかじりついてでも負けてはいない！
広次　行こう、行こう！
静子　何処へ？
広次　西島さんの所だ！
静子　何しに？
静子　お前は、黙って叔父さんのお伴をするじゃないか。黙って僕のついておいで！

――― 暗転 ―――

第一幕　第二場「第一幕と同じ日の午後、小説家西島の部屋」

壁面中央にに野村広次の描いた静子の肖像画がある。その隣に本棚があり、沢山の本が列んでいる。舞台中央に火鉢があり、かたわらに茶道具がある。

登場人物
野村広次（28 歳　テノール）　　静子（広次の妹　ソプラノ）
西島（33 歳　バリトン）　　芳子（西島の妻　メゾ・ソプラノ）
高峯綾子（高峯の妻　ソプラノ）

間奏曲
18 幕が上がる。第二幕
小説家西島の妻芳子と画家高峯の妻綾子が、火鉢を前にお茶を飲みながら話している。

綾子　野村静子さんに縁談がおありになるのですって？
芳子　えゝ。静子さんがあなたによろしくっておしゃっていたそうですわ。
綾子　静子さんはお綺麗になられましたね。相手の方が面白くないかたなのですって？
芳子　相川三郎というのらくら者なのだそうです。ご存じ？
綾子　存じません。
芳子　良くない噂があって、学校を退校させられた人なのだそうです。この間電車でお見かけしましたけれど、感じの悪い方でしたわ。
綾子　静子さんはお気の毒ですね。
芳子　本当に気の毒です。野村さんもお気の毒ですね。
綾子　本当にお気の毒ですわ。
29 二重唱
綾子　お綺麗になられた静子さん。美しくなられて。けれど、縁談のお相手が、
綾子　けれど、縁談のお相手が、よくない噂の人で、よくない噂の人で、お気の毒、お気の毒。
芳子　よくない噂の人で、よくない噂の人で、お気の毒、お気の毒。
綾子　お綺麗になられた、お綺麗になられた、静子さん。
芳子　お綺麗になられた、お綺麗になられた、静子さん。

――― 間 ―――

47　（野村広次と静子、下手から登場）
静子　（ステージ下手裏から）こんにちは。
芳子　…野村さんと静子さんがいらっしゃいましたわ。
（綾子と芳子、二人を出迎える）
静子　お兄さん、高峯綾子さんですよ。
広次　しばらくです。随分お目にかかりませんでしたね。
綾子　しばらくです。小説をお書きになったのですって？
広次　恥ずかしいものです。新まいですからね。（４人で火鉢を囲む）
綾子　静子さん、先日は失礼いたしました。
静子　私こそ、思いがけない所でお目にかかりましたもので。
綾子　私は、まだ故郷にいらっしゃるのかと思っておりました。
静子　父が亡くなりましたもので、去年上京したのですが、兄が誰にもお知らせしてはいけないと申しますもので。（西島、上手から登場）

47-29

西島　（広次の隣に座る）よくいらっしゃいました。ご用は？
広次　あとで一寸。
西島　私がお伺いした話だけは、綾子さんにもお話しました。構わないだろうと思いましたので。
広次　そうですか構いません。実はそのことで、急にもっとお話したいことができました。
静子　お兄さん、あのことは黙っていて。
広次　いいじゃないか。言わなければ話がわからない。
静子　それでもあの事だけは。
広次　黙っておいで。妹が叔母と一緒に１０日ほど前電車に乗ったら、相川三郎にあったそうです。そうして一昨日、叔父が妹をだまして相川の所へ連れて行ったのだそうです。
静子　叔父様がだましたと言うほどではありませんわ。
広次　黙ってお前を連れて出かけて、途中で相川のところへ行こうなどと、欺したのと同じじゃないか。そうして湯に入れと勧められたのです。
綾子　ええ！
芳子　ええ！
静子　お兄さん！
広次　そうして湯に入っていると、相川のお母さんが入ってきたのだそうです。
綾子　お母さんが。
芳子　お母さんが。
西島　お母さんが。
広次　つまり妹は体（てい）のいい身体検査をされたようなものです。
静子　本当に、お兄さんたら。
広次　黙っておいでといったら。妹が風呂から出たら、そこに相川三郎が立っていたそうです。
綾子　ええ！
芳子　ええ！
西島　ええ！
広次　妹は馬鹿だから、故意だとは思わなかったそうです。
綾子　相川三郎が。
芳子　相川三郎が。
西島　相川三郎が。
広次　私はそれを聞いたら、我慢ができませんでした。皆ぐるなのです。馬鹿にしきっているのです。

76-29 五重唱

綾子　我慢ができなくても、あたりまえ。
芳子　我慢ができなくても、あたりまえ。
広次　我慢ができなくても。
西島　我慢ができなくても。
綾子　それは、あんまりですわ。
芳子　それは、あんまりですわ。
広次　我慢ができなくても。
西島　我慢ができなくても。
静子　本当に、本当にあんまりですわ。
綾子　本当に、本当にあんまりですわ。
芳子　本当に、本当にあんまりですわ。

広次 ┌本当に、本当、あんまりですね。
西島 └本当に、本当、あんまりですね。
広次　こういう時、西洋では決闘をするのだと思いました。
四人　決闘を、思います。
広次　相川三郎の身体検査をしてやりたいと思いました。
四人　身体検査をしてやりたいと、思いました。
広次　こんなにされても、私たち二人はどうすることも出来ない気がするのです。
四人　どうすることもできない。
広次　この縁談をこわせば、
四人　このえんだんを、
広次　私たちは叔父の家にいられません。
四人　叔父の家にいられない。

76-69

西島　構わないでしょう。叔父さんの家を出なさい。
綾子　それが、いいですわ。
西島　少しのお金ならば当分どうにかなるでしょう。
綾子　それが、いいですわ。
西島のアリア
西島　いろいろ言っている時ではないでしょう。その先はその先です。二月か三月返事を待ってもらうことは出来るでしょう。二月か三月返事を待ってもらいましょう。野村君の仕事をひとまず完成させることを口実にして、家を出たらいいでしょう。その間に叔父さんが免職になったらそれまでです。叔母さんが抜け目なく上手いことやってくれるでしょう。野村君の仕事も、少しは目鼻ができるかも知れません。その時に断固たる処置をとっても遅くないと思います。

123-47

静子　お兄さん。西島さんのおっしゃるとおりにしましょうか。
広次　それでも。
静子　私、それが一番いいと思いますわ。
広次　それでも、あんまり虫が良すぎますから。
静子　それより他に、仕方ありませんわ。
西島　お金の心配ならよしなさい。明後日までに少しつくりましょう。君が書いた原稿料として、とってください。
広次　それでも、あまり虫がよすぎるからね。
静子　お兄さんは、急に元気がおなくなりになったのね。
綾子 ┌本当に、そうなさるのがいいと思いますわ。
芳子 └本当に、そうなさるのがいいと思いますわ。
西島　それとも、他にいいお考えがあれば言って下さい。
広次　（西島を見る）いいえ、不服があるわけではないのです。何だか初めからお金を借りに来たような気がして気がとがめるのです。
西島　それなら、そうしましょう。
広次　お金をいただく言われはないのですから。
静子　それはいただくいわれはありませんけれど。
西島　ありますよ。あなた方が相川家の手から離れることができれば、私はどんなにうれしいかわからないのです。君達二人が、叔父さんの立場の犠牲になる必要はない。

199-3

広次　（静子に支えてもらって、立ち上がる）綾子さんは、今日は赤ちゃんを連れて来なかったのですか？
綾子　今日はおいて来ました。
広次　今度家を持ったら、どうかいらっしゃってください。
綾子　ありがとうございます。是非伺います。
広次　大変お邪魔をいたしました。
静子　大変お邪魔をいたしました。
西島　それなら、明後日に来て下さい。
広次　ありがとう。　さようなら。
静子　　さようなら。
綾子　さようなら。
芳子　さようなら。
西島　さようなら。
（残る三人は火鉢に戻る）
――――　間　――――

199-29

綾子　静子さんもお気の毒ですね。
西島　随分同情するだろう。
芳子　静子さんは、本当にお美しい方ですね。
西島　（立ち上がって部屋の中を歩きながら）俺は早く仕事がしたい。お金の力を借りたいと時々思うよ。その方では俺は、殆ど無能力者なのだからね。金持ちになりたい、金持ちになりたい、金持ちになりたい。
綾子　（立ち上がる）そろそろお暇します。子供が泣いていはしないかと気になります。泣き声が聞こえるような気がしますわ。
芳子　また、いらっしゃい。
西島　またいらっしゃい。
綾子　ありがとう御座います。お二人で内にもいらっしゃって下さい。
西島　ありがとう、　きっと伺います。
芳子　　きっと伺います。
綾子　さようなら。
芳子　さようなら。
西島　さようなら。
――――　間　――――

芳子　静子さんは、随分美しい方ね。
西島　（立ったまま）あゝ。

199-76

芳子　さっきは、そんなに美しくないようなことをおっしゃった癖して。
西島　うん。
芳子　明後日までにお金をどのようにしておつくりになるおつもり？
西島　（本を一冊とって、火鉢のそばに座る）うちにいくらある？
芳子　ありませんわ。
西島　（本を見ながら）それで今月はどうするつもりなのだい？
芳子　実家から来月分を拝借しようと思ってましたの。それより仕方ありませんわ。あなたちっとも構わないのですから。

芳子　明後日までにお金つくるようなことおっしゃってましけど、お出来になるつもりだったの？
西島　出来なかったら本を売るつもりだったのだ。この本でも皆売れば少しばかりにはなるよ。
芳子　みんなお売りになるおつもり？
西島　そうでもないけど、いざとなれば売ってもいいと思っているよ。本は買えるときに買えばいい。どうせみんな読めはしないのだから。
芳子　いつまでお世話なさるおつもりなの？
西島　必要なくなるまでだ。
芳子　本をみんなお売りになるといいわ！
西島　売らなければならないときが来れば売るさ。
芳子　静子さんは、あなたの顔ばかり見て、あなたには何でも言えると思っていらっしゃるのですわ。あなたに甘えているのですわ。今日初めてお逢いになったのに。
西島　お前は同情しないのかい。
芳子　同情しますわ。ですけどあなたがあんまり同情なさるのですもの。きっと、私がいなかったらいいと思っていると思ったら、腹が立ってきますわ。
西島　そんなことがあるものか。お前は野村君の話を聞いても、俺のすることが間違っていると思うのかい？お前は自分のことしか考えていない。野村君の妹が相川三郎の所へ嫁に行ってもいい、行けばいい気持ちだくらいに思っているのだろう。
芳子　そんなことはありませんわ。けれど、あんまり美し過ぎますわ。心配になりますわ。
西島　大丈夫だよ。大丈夫だ。
芳子　あなたは少しもお金を稼ごうとなさらないし、一月や二月のことではありませんからね。私心配ですわ。

199-105 西島のアリア

西島　どんなことがあったって、どんなことがあったって俺のことは、俺のことは両親が飢え死にさせないことを知っている。お前のことも、お前のことも実家が、お前を飢え死にさせやしない。俺たち二人は、俺たち二人は自分のことは、自分のことは心配しなくていいのだ。

二重唱

芳子　私はそのことばかりを心配してやしませんよ。そのことばかりを心配してません。
西島　（本を見ながら、お茶を飲む）俺を信用できないのかい。俺を信用できないのかい。
芳子　今は信用しています。今は信用しています。けれど後で、けれど後で信用できないときが、信用できないときが来そうな気がしますわ。
西島　この俺を、この俺を俺を信用できないのか。信用できないのか。信用できないのか。
芳子　本がなくなるのも淋しいです。本がなくなるのも淋しいですわ。
西島　わかった！わかった！それなら野村君に、静子さんを相川三郎のところに嫁にやるより仕方がないと言のか。
芳子　そんなことありませんわ。
西島　（本を床にたたきつける。お茶がこぼれる）…お茶をふけ！
芳子　（呆然と立ちつくすが、気を取り直してお茶を拭く）。

―――　幕　―――

第二幕　第一場「西島の部屋」－広次の小説が雑誌に載った頃の西島の部屋－

壁面中央にに野村広次の描いた静子の肖像画がある。舞台中央に火鉢があり、かたわらに茶道具がある。本棚には、布がかぶせてある。

登場人物
静子（広次の妹　ソプラノ）　西島（33 歳　バリトン）
芳子（西島の妻　メゾ・ソプラノ）

18 西島のアリア

僕は久しぶりで、また恋というものを知った。それで、この頃少しも落ち着かない。頭が疲れているので、よく眠れない。

29 静子さんに、よき夫を世話しようと思った。いい人が見つからなかった。そうして僕は、凱歌を上げた…。

僕も野村も、自分を生かすためには、犠牲を要求する。それは僕の妻か、静子さんかだ。

47 静子さんは、自分から進んで相川三郎の妻になりそうな気がする。僕の心と、野村の心は、静子さんが相川三郎の妻になることを望んでいる。静子さんはそのことを感じている。

金儲けに小説を書いてみようと思ったけれど、しくじってしまった。僕には、野村兄妹を養う力が、じきになくなりそうだ。

―――　間　―――

76

静子　（下手に登場）こんにちは、高峯さんがいらしってたのですって？
西島　ええ。（座布団を勧める）
静子　この間は失礼いたしました。（西島の傍らに座る）
西島　僕の方こそ。
静子　後で兄に怒られましたわ。
西島　おかくしになったので？
静子　何を？
西島　雑誌に評が出ている事や何かを。
静子　いいえ、まだ兄は知りませんのよ。
西島　ご存じですよ。この間の二人の話を全部聞いていらっしゃったのですよ。

76-18

静子　全部？私には聞かないふりをしてますよ。わたくしも知っているのではないかと思いましたわ。後で。
西島　野村君はお元気ですか？
静子　（火箸をいじっている）何だか淋しがっています。ノイローゼ気味なのです。
西島　それは心配ですね。あんまり無理をなさるから。
静子　無理もしたくなるでしょう。あなたも、今日は神経質な顔をしてらっしゃいますよ。
西島　そうですか？僕はわりに元気ですよ。寒くはありませんか？
静子　（火箸をいじりながら）いいえ、別に。
西島　障子を閉めてもいいですか？
静子　えゝ、兄は今日、私があなたの所へ伺うのを心配しておりました。
西島　（障子を閉めに立ちながら）何故です？
静子　兄は、この頃よく私のことを心配しますの。やけを起こしてはいけないよ。思い切ったこ

とをしてはいけないよ、と申しますの。私が兄に心配することを、兄は私に心配しますの。

76-47

西島　本当に辛抱してください。

静子　随分長い辛抱ですわね。そうしてあなたに、ご迷惑をかける辛抱ですわね。

西島　僕はちっとも迷惑は受けていません。

静子　本がある間は、でしょう。

76-58

そうして本がある間は、もうじきですわね。

西島　本は、あなたが思っているほど、なくなってはいません。

静子　私はもう欺されている顔はしませんわ。本当のことをおっしゃって下さっていいでしょう。

西島　どうか心配しないでください。この上あなたに心配をかけたくないのですから。

静子　そんなことをおっしゃると、皮肉に聞こえますよ。

123

西島　（立ち上がり、歩きはじめる）決して皮肉ではありません。今のままにしていらっしゃるのが、一番いいと思います。

静子　本当にそう思いますの？どうか本当のことをおっしゃってくださいな。私、どんなことを言ってくださっても、うれしいのですから。

西島　…どうか、今のままにしていてください。つらいこともあるでしょうが。

123-18

静子　恐ろしいことが、未来に待っておりませんでしたら。私、今のままを幸福と思っていますわ。ですけれど、私にはいろいろのことが、私たちを待っているような気がしますわ。

123-29

西島　（振り返って）どんなところで、どんな幸福が待ち伏せしているかわかりません。今のままにしていてくだされば、僕は喜んでできるだけのことはします。

123-47 静子のアリア

静子　それを私は恐れていたのですわ。私は恐れていたのですわ。私は、あなたにできるだけのことは、あなたにできるだけのことは、して頂きたくなかったのです。
ただ余分だけで、ただ余分だけで、助けて頂きたいと思ったのです。
それに、奥様もいい気はなさらないでしょう。あなたは私たちのために、共倒れになってもいいと思っていらっしゃいます。私にはそれが、わかって参りました。

123-76

それが何より恐ろしいのです。

199

私たちを世話することを、奥様は喜んでいらっしゃいますの？今日私が、一人で上がることを奥様はご存じですか？奥様は、私を憎んでいらっしゃるでしょう？

西島　そんなことはありません。僕に力がないのを、びっくりしたでしょう。

静子　私が思っていたよりは。

西島　あなたはもう、僕の世話になるのは嫌ですか？

199-15

静子　本当に、この頃のようでしたら。相川の所へ行けとおっしゃっても、私は恨みはいたしませんわ。兄はものになりますわね？

静子　兄に妻のようないい人が、妻のようないい人がおりましたら、私がいなくても、私がいなくてもものになるでしょう？

199-29 二重唱
西島　（懐から紙包みをだす。振り返って静子に渡す）今日はこれだけ持って帰って下さい。
静子　（受け取り、頭を下げる）ありがとうございます。（紙包みを見ずに自分の脇におく）。
　　私、こうやっていますと、本当に落ち着きますの。
199-47
　　お邪魔になりませんわね。
西島　（静子の隣に座る）なりません。
静子　奥様は、何時にお帰りになりますの？
西島　晩飯頃でしょう。
静子　お留守に上がって、お留守に帰るのは変でございますわね。
西島　それでも、そういうことがあるのですから、仕方がありません。
静子　私は、本当にどうしたらいいのでしょう。
199-76
西島　（静子を抱き寄せる）静子さん、僕に任せてください。僕にすべて僕に任せてください。
静子　（振り払い、驚いて立ち上がる）何をなさるの！
199-76-11
　　あなたはやはり、私を妾にしようと思っ　　ていらっしゃるのですね。
西島　（うなだれて、座ったまま）許してください。決してそういうつもりではなかったのです。
静子　どっちにしろ、同じ事ですわ。私帰ります。

　　―――　間　―――

西島　（立ち上がる）怒ってますか？
199-76-29
静子　（立ったまま）怒っていません。
西島　（立ったまま）もう、決してしません。一言許すと言って下さい。
静子　障子を開けて下さい。
西島　はい。（障子を開ける。紙包みを取って）これを持って帰ってくださいませんか？
静子　いりません。
西島　どうしても、許してくださらないのですか？
静子　（受け取る）私を憎らしく思わないでくださいね。さようなら。（下手に退場）
西島　（火鉢に戻る）…。

　　―――　間　―――

199-124
芳子　ただ今。
西島　早かったね。
芳子　けれど、ちょうどいい時に帰ってきたでしょう。
199-141
西島　何を言うんだい。
芳子　もっと早かったら、お怒りになるでしょう。今まで誰がこの部屋で、あなたと差し向かい
　　になっていたか知ってますよ。（隣に座る）
西島　それが何だ、

芳子　私の留守に、すましてここへ上げるなんて。あなたは、今日私が実家へ行くかと、何度も念を押したわね。留守にわざと、お呼びになったのではなくって？そうでしょう？

199-152

西島　…相談があったのだ。二人だけで相談したいと言われたのだ。

芳子　私がいてはいけない相談？

西島　お前がいては、野村の妹が遠慮するからだ。

芳子　おかしな方ね。

西島　何が。

芳子　静子さんのことだと、すぐにお怒りになるのね。

西島　お前が角のあるものの言い方をするからだ。

199-170 芳子のアリア

芳子　女は、女同士で相談するのが当たり前ですわ。妻のある男の人と相談するのがほほえましいですわ。へんな噂があるって、実家の両親が心配しておりましたわ。静子さんが、あなたの妾だという噂だそうです。実家の知っている人が、近所に住んでいるのですよ。静子さんは嘘つきですよ。叔父さんの家に決して行かないと言ってらっしゃいましたね。たった今、入るところを見ましたわ。

西島　本当に見たのだね？

芳子　ええ。そら、ご覧あそばせ！

322

西島　黙れ！野村の妹は、相川の妻になると決めたのだ！

芳子　私、きっとそうだと思いましたわ。

西島　お前に何がわかる。たった今決めたのだ。俺が頼りにならないことを知ったのだ。お前は、それを見て黙っていたのか？

322-11

芳子　だって、駆けていって止めることもできないじゃないですか。（本棚の側に行く）本をお売りになったのね。

西島　売った。

芳子　そのお金をどうなさって？

西島　全部、野村の妹にやった。

芳子　うちは、どうなさるおつもり？

西島　お前の方はどうだった？

芳子　だめでしたわ。

西島　どうにかなる。

芳子　うちなんか、どうなったっていいのでしょう。私なんか、どうなったっていいのでしょう。私なんか、心配して死んでしまう方がいいのでしょう。噂は、やはり本当なのですね。

西島　嘘だ。明日になれば、皆わかる。お前は、野村の妹に、感謝していいのだよ。感謝していいのだ。万事過ぎた！

322-29 二重唱

芳子　（ヒステリックに）感謝していい？ 感謝していい？この絵をはずしてください！この絵をはずしてください！この絵を、この絵をはずしてください！

西島　お前は、野村の妹に、感謝していいのだよ。万事過ぎた！万事過ぎた！

322-47

西島　万事過ぎた、この絵をはずそう。この絵を、この絵を、この絵を、この絵を、この絵を、この絵をはずそう。

芳子　この絵をはずしてください。この絵をはずしてください。この絵をはずしてください。

322-47-11

西島　この絵を、この絵を、この絵を、この絵を、この絵をはずそう。この絵をはずそう。この絵をはずそう。この絵を、この絵を、この絵を、この絵を、この絵を、この絵をはずそう。はずそう。

芳子　はずして、はずして、はずして、はずして、この絵をはずして、この絵をはずして、この絵をはずして。この絵を、この絵を、この絵を、この絵をはずしてください。

――――　暗転　――――

第二幕　第二場「広次の借間」

広次が叔父の家を出て、静子と暮らす借家の一間。広次が一人で机にむかっている。

登場人物

野村広次（28 歳　テノール）　　静子（広次の妹　ソプラノ）

西島（33 歳　バリトン）　　芳子（西島の妻　メゾ・ソプラノ）

広次のアリア（ステージ中央に立つ）

広次　静子が叔父の家に行ったようだ。決して叔父の家には行かないと言ってたのに。相川の家に嫁ぐことを決心したのだ。こうなることを恐れていた。でも、でも今の僕には決心を固めてしまった妹を、どしてやることもできない。たった一人の妹を、こんなに思っていても、力になれない自分が情けなくなる。僕には妹を幸福にしてやれる力はないのだ。

間

西島　今晩は、西島です。散歩の帰りでお寄りしました。

芳子　今晩は。お邪魔でしたか。

広次　やあ、西島さん、お揃いでよく来てくださいました。先程は、妹がお邪魔いたしまして。

西島　（広次の傍らに二人で座る）この家はいかがですか。何かお困りのことがあったら、おっしゃってください。

広次　今のところ大丈夫です。西島さん、本当ですか？妹が今日叔父の家に行ったというのは。

芳子　私がお見かけしましたの。今日実家から帰りに、叔父さんの家に入る静子さんをお見かけしましたの。

広次　そうですか。妹は、お宅に何時頃までいましたか？

西島　３時頃だったでしょう。もっと早かったかも知れません。

広次　そうですか…。私はまた、あなたの所にゆっくりしていたのかと思いました。

西島　妻から静子さんが叔父さんのお宅に入るのを見かけたと聞きましたので、もっと早くお尋ねしたかったのですが…。そのくせ、私はあなたに、このことを何と言っていいのか分からなかったものですから。それでお伺いするのが遅くなってしまいました。

広次　そうですか（物思いに沈んでいる）…。

三重唱

西島 ）いろいろなことが起きて、それが一つになって静子さんを追いつめてたのだと思います。
芳子 ）いろいろなことが起きて、それが一つになって静子さんを追いつめてたのだと思います。
広次　こうなることに打ち克とうと思いました。たった一人の妹を、こんなにまで思っていても、どうすることもできないのが残念です。
西島 ）静子さんは、いずれは叔父さんのお宅にいらっしゃる決心だったと思うのです。今日叔父
静子 ）さんの家に行かなかったにしても。

間

広次　そこにいるのは静ちゃんかい？
静子　（ステージ裏より）ええ、そうよ。（茶道具を持って登場）兄さんに怒られても、上の方がいいわ。いらっしゃいませ。先程は長々お邪魔致しました。
（広次と西島夫妻にお茶をつぐ）
西島　いいえ、何のおかまいもできなくで。

間

広次　お前は叔父さんの所に行ったろう。
芳子　叔父様のお宅に入られる静子さんをお見かけいたしましたと、お兄様に申しましたの。
静子　……。（うつむいたまま黙っている）
広次　やはり本当なのだね。
西島　まさか、私の所の帰りに叔父さんのお宅にお寄りになるとは思いませんでした。
静子のアリア（中央に立つ）
静子　お兄さん、お兄さん、そばを離れるのを許してくださいね。そして私はやっぱり、いい妹だと思ってくださいね。私は悲しくはありません。生きて兄さんの仕事を見ることができますもの。それに、叔父さんがおせきになるのですもの。
…私は、今日は西島さんにお暇乞いに上がったのです。私が、早く行き着くところに行き着かないと、どんなことになるかわかりますわ。

間

芳子　私たちにお二人の、力になれる余裕がないことが、とても残念です。
広次　僕の世話は誰がするのだ。
静子　…叔父さんの所の小間使いがいたします。
広次　…承知したのか。
静子　喜んでいますわ。叔父さんと叔母さんも喜んでいらっしゃいましたわ。…明日、叔父さんの所の小間使いを連れてきます。あの子はいい娘ですわ。私、いなくなるまでにお兄さんの世話をよく仕込みますわ。西島さんのご恩は忘れはいたしません。
芳子のアリア
芳子　私たちも実家の両親を頼って生活しておりますので、お二人のお力添えをするには、夫の本を売るしかありませんでした。それで、かえってご心配をお掛けすることになってしまって、申し訳ありませんでした。
広次 ）西島さんにはこんなにまでして頂いて、本当に感謝しています。
静子 ）西島さんにはこんなにまでして頂いて、本当に感謝しています。
西島 ）いいえ、自分の非力さが、残念でなりません。もっとお力になれればよかったのですが。
芳子 ）いいえ、自分の非力さが、残念でなりません。もっとお力になれればよかったのですが。

静子　西島さん、これからも兄のお力になってくださいますか。兄の仕事のお力添えをして頂けないでしょうか。
西島　これからも、お兄さんのお力添えをしたいと思っています。
芳子　これからも、お兄さんのお力添えをしたいと思っています
静子　ありがとうございます。これで安心してお嫁に行けますわ。（－間－）
…私はお兄さん置き手紙をして、明日逃げようと思っていたのです。
西島さんにもお手紙を書いておくつもりでしたの。
広次　僕と二人で暮らしているのに、どこへ逃げるのだ？
静子　…今晩叔父さんが、相川さんの所へいらっしゃいますの。
広次　お前は、叔父さんにそんな約束までしてきたのかい。
静子　それでも、叔父さんがおせきになるのですもの。
西島　私の所で相談しているときに、もうそれがわかっていたのですか。
静子　叔父の家へは行くつもりでした。
静子　怒っていらっしゃる？
広次　怒ってない。そうか、静ちゃんはお嫁に行くのか。許すも許さないもない。お前の災いを取り除いてやりたい。身体を大事にしておくれ。僕の仕事も目鼻がつくだろう。
静子　あせらないで頂戴ね。兄さんの仕事を見るのが楽しみです。
四重唱
西島　お兄さんのお仕事は、お兄さんのお仕事は。
芳子　お兄さんのお仕事は、お兄さんのお仕事は
静子　生きていて、見られて、いれしいです。
広次　僕は、助けられて生きている。力が欲しい。
西島　お兄さんのお仕事は、お兄さんのお仕事を。
芳子　お兄さんのお仕事は、お兄さんのお仕事を。
広次　僕はこんなにまでしないと、僕は生きて行けないのか。
広次　僕は生きて行けないのか。
静子　生きていて、お兄さんのお仕事をずっと見ていますわ。
広次　西島さんのお力添えに感謝してます。
静子　西島さんのお力添えに感謝してます。

間

西島　（立ち上がる）それでは、僕たちはこれで失礼します。
芳子　（立ち上がる）お邪魔いたしました。
静子　（立ち上がる）西島さんの所の帰りに、そのまま叔父の家へ行ったことを許してください。ご恩は忘れはいたしません。
（西島夫妻と静子、下手に歩き、立ち止まる）
西島　有難う。（野村の方を向いて）野村さん、それなら又。
広次　本当にありがとう。それならばまた、どうか。
西島　有難う。（静子の手を握る。静子に）さようなら。
静子　……。
広次　（少し大きな声で）さようなら。
静子　ご親切をうれしく思っています。奥様も本当に有難うございました。
芳子　お邪魔致しました。さようなら。
西島　それなら、また何時か。（下手へ退場）
幕